



只見町ブナセンターだより

<季節のごあいさつ>

今年は、天候不順により紅葉を心配していましたが、例年通りきれいな紅葉が見られました。そうこうしているうちにあっという間に初雪を迎えました。今年は11月14日でした。

===== 今後の予定 =====

【企画展】「守りたい！只見の野生動植物

－只見町の野生動植物を保護する条例－

会期 2017年12月23日(土)～2018年6月25日(月)

場所 ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー

2016年6月に「只見町の野生動植物を保護する条例」が施行されました。この条例は、町、町民、事業者および来町者が一体となって自然環境と野生動植物の保護・保全に取り組み、その保護・保全と天然資源の持続可能な利活用による地域の発展を目指すことを目的としています。この企画展は、この条例の内容とその役割、地域の野生動植物を保護・保全することの重要性とを理解していただき、町内における保護・保全への取り組みにより多くの方に協力いただくことを目的として開催するものです。

企画展では、第1部として、只見町の自然環境・野生動植物とそれらを基盤とした地域住民の生活文化の現状を概観し、この条例の制定に至る町の自然保護の道のりについて説明します。第2部では、只見町の野生動植物の存続に危機をもたらす要因を具体例とともに紹介し、その保護・保全のために関係者が配慮すべき項目について説明します。第3部では、この条例の役割や制定の背景、目的、内容などについて解説します。第4部では、町内に生育・生息する動植物のうち、特に保護が必要とされる絶滅危惧種や「町指定貴重野生動植物」を紹介します。他に、野生動植物や外来種など関係する動植物の標本、条例周知用の横断幕、関連書籍などを展示する予定です。ぜひ、ご来場ください。



▲上：保護条例を周知する横断幕



▲左：フクジュソウ
右：ただみ八コネサンショウウオ

===== 活 動 報 告 =====

【ブナセンター講座】 7月15日（土）

「雪を味方につけた植物たち」 講師 加藤 英寿 氏

今年7月17日まで開催していた企画展「多雪地帯に生きる 日本海要素植物」に関連し、日本海要素植物の生態を理解するためにブナセンター講座を行いました。講師の加藤英寿氏は、首都大学東京・牧野標本館の助教授で、植物の系統と生物地理、進化、生物多様性などを専門に研究しています。主に小笠原諸島で調査研究されていますが、奥会津でも調査を行っており、平成25年度の「自然首都・只見」学術調査研究助成を受け、蒲生岳に生育するツクバネウツギ属の分類を研究されました。その成果は、ブナセンター紀要 No.4 に掲載されています。



▲熱心に説明を聞く参加者

はじめに日本海要素植物の説明がありました。日本海要素植物とは、日本海側を中心に分布する植物のことです。対照種とされる近縁種が太平洋側に分布するものも多く、両者の違いとして、草本や落葉樹では、日本海側に偏在する種では葉が丸く大型、太平洋側では細く小さい傾向があります。常緑樹では、日本海側では低木で、幹が曲がってしなる傾向があり、太平洋側では高木となり、直立する傾向があります。只見町に生育するハイイヌガヤ（対照種イヌガヤ）やエゾユズリハ（対照種ユズリハ）はこの典型です。

日本海側と太平洋側とで分布がわかる理由として、積雪の有無と冬期の乾燥、山脈による分断が考えられます。積雪が植物に与えるメリットは、保温や保湿効果、春の芽吹き時の豊富な雪解け水の供給で、デメリットは、遮光による成長期間の短縮と雪の重みによる圧力、雪ぐされ病の感染です。日本海要素植物の積雪地環境への対応方法を只見町を代表する植物、ユキツバキとヒメアオキを例にあげて、対照種との比較で見ていきました。

ユキツバキは、対照種ヤブツバキと比較すると、葉の糖消費量が少なく、長期間光合成をしなくてもよく、かつ光合成能力を失わない生理的な特徴があります。また、雪の中で葉の気孔が閉じたままになっており、雪ぐされ病など菌の侵入を防いでいます。そのため、4か月以上もの間雪に閉ざされても生き延びることができます。ヒメアオキの場合は、対照種アオキと比較すると、小さな植物体で開花することができる特徴があります。この特徴は、積雪期間が長く、成長できる期間が短い



▲多雪環境に生きるユキツバキ

地域で、繁殖することを可能としています。

このように、多雪環境をどのように生き抜くかは、植物種によって異なっています。只見町のあちこちで見られる日本海要素植物は、それぞれの種がそれぞれの特性や制限の中で生み出してきた方法で、この過酷な環境で生き残り、子を残し、根付いているのだということでした。講座には 22 名が参加し、雪という只見町の最も特徴的な自然環境と植物の関係について理解を深めることができました。



【自然観察会】 7月16日(日)

「夏のブナ林で日本海要素植物を観察しよう」

只見町の特徴的な植物である日本海要素植物について理解を深めるために、蒲生川支流の真奈川にある“あがりこブナの森”（ただみ観察の森）において、ブナ林の林床に生育する日本海要素植物の観察会を行いました。この森を含む只見川左岸は町内でも特に積雪量が多い地域で、只見町の特徴的な日本要素植物種が揃っています。また、かつてここは旧真奈川集落の住民の薪炭材採取の場所として利用されていたため、あがりこ型樹形のブナやかじご焼きの跡など人の利用の痕跡もみられます。

はじめに、観察の森の入口で、只見町の環境的特徴や雪食地形など、全体的な自然の特徴について説明しました。ブナ林内には、林床にユキツバキ、ヒメアオキ、エゾユズリハなどの日本海要素が繁茂しています。前日のブナセンター講座の講師である加藤英寿氏に、実物を前にそれぞれの種について解説していただきました。林床の低木は、冬の間は雪の下になり、地面に押し付けられます。ユキツバキは、そうした中で、地面に着いたところから発根し、途中の幹が枯れると別個体として数を増やしていくそうです。それにより、一帯に広がるユキツバキが同一個体のクローンからなる場合もあるそうです。また、エゾユズリハの葉の交代について、枝先から新葉が出るので、枝の付け根の方ほど葉が古く、付け根の方から落葉していくことなどをお話いただきました。ほかに、ブナのあがりこ型樹形の形成の過程やかじご焼きについて、ブナセンタースタッフが説明しました。観察会には、町内外から 23 名の方が参加し、只見町に生育する身近な植物について理解を深めました。



▲入口で対岸の雪食地形を説明



▲解説する加藤氏



【調査活動】

「ナラ枯れ分布調査」

只見町ブナセンターでは、7年前より町内のナラ枯れ分布調査を行っています。ナラ枯れは、カシノナガキクイムシが媒介するナラ類に感染する伝染病です。感染した木は、通水障害を起こし、葉が急速に赤褐色に変色し、そのほとんどは枯れます。調査は葉の変色が見られ始める7、8月から紅葉までの間に行っており、町内の国道などから確認できる枯死木の場所と本数を地図に記録しています。只見町には、新潟側（六十里越、八十里越）からナラ枯れが侵入し、広がったと考えられています。今年は、昨年度よりも広範囲に被害木が分布し、特に旅行村や黒谷、福井集落などで大規模にナラ枯れが確認されました。また、大倉や布沢では単木的な被害が確認され、それよりも伊南川上流域にはナラ枯れは見られませんでした。ナラ枯れは森林機能の低下、景観の悪化などいろいろな悪影響を引き起こします。今後も巨樹巨木を中心としたナラ枯れの防除とともに分布調査を続けていく予定です。

===== その他のお知らせ =====

【只見町ブナセンター 2017年度の行事案内】

開催期間	行事名
12月9日(土) ～翌年6月25日(月)	【企画展】 「守りたい！只見の野生動植物－只見町の野生動植物を保護する条例」
2018年2月下旬	【座談会】「只見町の狩猟の伝統を聞く」(仮)
2018年3月	【ブナセンター講座】「野生動植物を守る！～考え方と取り組み」(仮)
2018年3月	【自然観察会】「冬のブナ林観察会」

※行事情報は随時HPへ追加していきます。

<編集後記> 只見町では最低気温が 0℃近くまで下がる日があり、14日には初雪がありました。私は、急な温度変化で体調を崩し、休むことがありましたが、みなさんは風邪をひかないように暖かくしてお過ごしください。(石川)

発行 **只見町ブナセンター** 〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590 番地

電話 0241(72)8355 ホームページ <http://www.tadami-buna.jp>

FAX 0241(72)8356 電子メール info-buna@amail.plala.or.jp

附属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」、「ふるさと館田子倉」

開館時間：午前9時～午後5時（最終受付は午後4時まで）

休館日：火曜日（祝祭日の場合は翌平日）、年末年始（12月29日～1月3日）

